



新刊  
紹介

## 『迷子の魂』『個性的な人』

オルガ・トカルチュク(文) ヨアンナ・コンセホ(絵) 小椋彩(訳)

岩波書店 2020.11 / 2024.7



ポーランドで生まれ、このたび小椋彩さんの翻訳で岩波書店から刊行された二冊の絵本『迷子の魂』と『個性的な人』には、オルガ・トカルチュク文、ヨアンナ・コンセホ絵と記されているが、特に前者では、最初にほんの二行ほどと、その少し先に一ページびっしりの文があるだけで、あとはひたすら絵が語る展開となる。

人のいないベンチ、がらんとした店、汽車の窓から外をながめる子ども…… じっと椅子にすわって、どこかへ消え去った自分の魂がもどってくるのを待つ男の髪は、次第に長くのびていき、モノクロの光景のなかで、男がひざにかかえた鉢の、ゼラニウムらしき植物だけが、緑の葉をぐんぐんひろげる。窓からそれをのぞく子ども。次の見開きで、髭もじゃになった男と、おかっぱ頭の子どもとが、美しい緑の葉越しに見つめあう顔の、美しいこと。そのあと、二人が並んで腰かけている絵も、静かで、暖かくて、忘れがたい。最後は、空高く枝をひろげるゼラニウムの下に、ぽつんと建った赤い屋根の家があるだけの光景だ。よく見ると、家の近くに、ルーペがないと見逃しそうな、小さな赤い椅子が二つ。男と魂は、いつもここでお茶を楽しむことになるのだろう。

『迷子の魂』は幸せに終わるが、『個性的な人』のほうは、かなり不穏だ。最初のうちは、赤ちゃんを抱く母親、幼児をはさんでしゃがむ夫婦などの、幸せそうな家族写真ばかり。それがしばらく続いて本文になると、個性的な顔で絵のモデルになり、コマーシャルにも出演した少年のうれしげな顔が、眩しい逆光に半分隠されて、クローズアップされる。だが、そのあと、寄せ集めのように続く写真には、うし

ろ姿や、鏡に、もやっと映った顔や、彼が見たらしい、世界各地の景色があるばかりだ。

終わり近くの、左右から折り畳まれているページを開いてみると、大きな絵があるのかと思いきや、あるのは字ばかりで、男の顔がスマホで自撮りをするたびに薄れていき、もやもやしたシミになり果てたいきさつが語られていた。そのあと彼は、新しい顔を不法に入手するすべを知るのだが…… という展開で、こちらは、「お楽しみください」とお勧めしていかどうか、ちょっとためらってしまうが、モノクロとカラーとをとりまぜた絵の見事さは、たいしたものだ。日本の夜の街を走るバスの絵、そのおむかひのページにある、何本もの筋になってガラス窓を伝う雨水越しに見る町の風景など、その場所、その時間に、迷いこんだような気にさせられる。

絵本ではあるが、どちらも、明らかに大人のためのもの——生きることにくたびれて、一人になった大人が、『迷子の魂』の男のように、ひよいとやってきた見知らぬ少女と語りあえるようになるには、どう生きていけばいいのか、それを思ってみる、ありがたい糸口になりそうだ。背表紙を、わざと傷んでいるかのように見せているデザインも、心憎い。

(脇明子、ノートルダム清心女子大学名誉教授)

『個性的な人』は、オルガ・トカルチュク文、ヨアンナ・コンセホ絵による絵本の第2作です。

主人公は個性的な顔立ちを持ち SNS で自身の情報を発信していますが、ある日、自分の顔が少しぼやけていることに気づきます。誰かが彼の情報画面をタップする度に顔がぼやけていき、ついに無くなってしまいます。不安に襲われた彼はある行動に出ますが、多大な犠牲を払って顔を手に入れた後、戦慄するような状況に会い、最後に不気味な言葉をかけられます。SNS などの過剰で不確かなネット情報に翻弄されている中、個性が失われていくという問題を投げかけた大人向けの絵本です。

この絵本では、文章はある部分に集中していて、ほかのページはちょっとした言葉のかけらだけ、あるいは全く絵だけで、その世界に浸っていくように各場面が展開されています。まるで著者の「文学のように」言葉の間を存在と時間を超えた第4の視点で見つめ

ているように描かれています。著者と画家の間の深い信頼ゆえにこのような表現が可能なのでしょう。

前作『迷子の魂』でも行間を紡ぐように静かに場面が描かれています。ただ、本作の不安が残る結末とは対照的に、「ゆっくり」自分を待つことで最後に自分の魂と出会います。

「文学のように」と書きましたが、現在の SNS のように真の情報が見えにくい状況に対し文学のもたらす可能性について、著者はノーベル賞講演『優しい語り手』\*の中で次のように語っています。

「文学は登場人物の内面での理由づけや動機づけに焦点を当て、別の人には触れることのできない経験を明らかにし、心理的な解



積の中へ読者を駆り立てます。文学だけがわたしたちを他者の生活の中に深く立ち入らせ、その理由を理解させ、感情を共有し、運命を体験させることができるのです」(拙訳)文学がもたらす個性の認識への期待を感じさせる言葉です。

本作も含めて、小椋彩さんの訳は、著者の世界観や背景(中欧文学の存在、第4の視点)なども踏まえ、詳細な下調べのもと、丁寧に、張り詰めた空気

感を歪めることなく淡々と表しています。ときおり著者の遊び心も織り交ぜながら。

『個性的な人』に出会った方は前作『迷子の魂』もぜひ合わせて読んでみてください。自分を見失いがちな情報過多の現在、文学的な絵本であるこの二篇は、情報の嵐の中で自分を取り戻すために大切なことを気づかせてくれると思います。

(住谷秀保、茨城大学工学部元教員、PJATK 短期専門家)

## 『ヘルベルト詩集』

ズビグニェフ・ヘルベルト(著) 関口時正(編/訳/解説) 未知谷 2024.10

関口時正氏の彫心鏤骨の訳業になる佳麗な訳詩集。訳者は自ら表紙・カヴァーの装丁に関わっている。9本ある詩集の初版の出版年の順に、各詩集から精選された91編の詩が並ぶ。難解なそれらの詩を読み解く糸口を探してみた。



〈ヘルメス〉詩人はヘルメスを「わが守護神」と呼んで、自身をヘルメスに擬している。第二詩集『ヘルメスと犬と星』に同じ題名の詩がある。「ヘルメスが世界をゆく。犬に出逢う」「私は神です」と礼儀正しく身分を明かし、犬に挨拶する。犬は冥界の番犬ケルベロスであろう。犬はヘルメスの手を舐め、彼を受け入れる。二者は星に出逢う。星はアフロディテであろう。三者は世界の果てまで旅に出る。

ヘルメスは「神々の使者」であり、死者の靈魂を冥界に導く「魂の導者」である。翼のあるサンダルを履き、翼をもつ帽子を被ったヘルメスは天界・下界・冥界の間を自由に行き来する。そして何よりも神々をも欺く智者である。その叡智をもって詩人は、ギリシャ神話・オリエント神話・旧約聖書の伝説あるいは古典文学の主人公たちの引喩を織り交ぜて彼の生きた時代・社会の風潮を批判する。

たとえば「天使の取調べ」は固有名詞を記さずにスターリンの肅清政治を痛烈に批判した詩と読める。検閲者の目を欺く詩人の叡智である。

〈単独者〉『コギト氏』はヘルベルトの分身である。デカルトの「われ思う、ゆえにわれ在り Cogito, ergo sum」に由来する。しかしヘルベルトはデカルト的であるよりもパスカル的人間であるように思える。ロシア出身の実存哲学者ベルジャーエフは「根源的なのは(われ)であり、それは何ものからも導き出されず、他の何ものにも還元されえない」とデカルトの前提を誤謬とし、「われが実存する、ゆえにわれは思惟する」のだ、と主張する(『孤独と愛と社会』氷上英廣訳)。思惟に先立って実存する人間は「傷める葦」であるが、それは「考える葦」である(パスカル)。

コギト氏は日々思考する。「僕の中には思考する炎がある」(『銘』)。ヘルベルトはソ連型の教条的社

会主義もナチズムも同質的なものと観て全体主義を憎悪した。その両者に支配された時代のポーランドを彼は単独者として生き抜いた。

〈魂の故郷〉ヘルベルトの実存の根源は彼の故郷の町ルヴフ Lwów (現在はウクライナ領リヴィウ)にある。18世紀にポーランドが分割されオーストリア領となった時代には Lemberg と呼ばれガリツィアの首都であり、大学、ギムナジウムがあり古典主義的教育がなされた。第一次大戦後ポーランド領となったが、第二次世界大戦でナチスドイツに占領され、戦後ソ連領となった。

ヘルベルトはドイツ占領下、地下大学で教育を受けた。ナチスとソ連に支配され多くの市民が殺害され家を失ったルヴフの運命は、ポーランドのそれと同じであった。ルヴフの町もポーランドも彼には帰ることができない失われた永遠のふるさとだった。故郷の町に「唯一残ったものと言えど／チョークで円を描いた／舗道の板石／私はその中心に立つ／一本の足で／跳躍の一瞬前」(『故郷の町に帰ることを考えるコギト氏』)。

ヘルベルトの詩には「一本足で」という語句が何度か登場する。少年時代右足を骨折し、健全なのは片足だけであることを解説によって知った。しかし彼は一本足で跳躍し、飛翔する。「片足立ちの神」イアソンの神話を意識していたとも思える。

「接続法の魅力を欠いた統語法」を軽蔑し(『趣味の力』)、主節と従属節とが有機的にしっかりと結合された完全な複合文を志向した(『日禱』) ヘルベルトは、自分の詩には句読点を用いていない。

ポーランド語の達人、関口時正にしかできない訳業である。(栗原成郎、東京大学名誉教授、会員)